山登如

2021年度
付中通信 12 号

手に入れたもの

2021.12.21（火）　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛

うれしい知らせが飛び込んできました。外務省と公益財団法人国際連合協会が主催する「令和３年度国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」で全国人権擁護委員連合会会長賞を受賞した六年制普通科１年の吉野悠太さんが、この度「奥・井ノ上日本青少年国連訪問団派遣事業」の参加者に選ばれ、３月に東京で開催される各種関連プログラムに派遣されることが内定しました。

http://www.unaj.or.jp/concours/（公益財団法人国際連合協会の HP）

この「高校生の主張コンクール」は、「全日本高校模擬国連大会」と並んで高校生に取り組ませてきた本校における２大コンクールの片翼を担うものです。過去１回、特賞（上位４人）となり、ニューヨークへの国連訪問団として派遣された生徒がいますが、最近 10 年間は中央大会進出はできても、優秀賞（６名）の中に１人選ばれたのが、精一杯でした。

したがってこの度の吉野さんの受賞と派遣プログラムへの参加決定は、昨年度「模擬国」でニューヨーク世界大会への出場を決めたことに並ぶ英光だと言えます。世界大会出場は、14 年間にわたってニューヨークを見据え多くの先輩たちがバトンをつないでくれたお蔭だと以前この通

国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール
過去の中央大会の一場面

信に書きましたが、「主張コンクール」も全く同じです。吉野さんの前にも都合１７名の先輩たちがいて、バトンをつないでくれました。

　さて、ここで裏話ですが、実は「主張コンクール」の指導は二人の教員が手分けして行っています。一人は作文の指導で、もう一人はスピーチの指導です。

　生徒が手掛けてきた作文は、いわゆる文語の体をなしているので、それを口語、つまりスピーチ原稿に仕立てなくてはなりません。その過程で、内容の見直しという作業を生徒と一緒に行います。推敲に時間と労力を費やすことになりますが、書き手である生徒本人の生身の体験とその時の心の動きを注意深く追いながら、個性的かつ独自なものの見方と発想を汲み取ることに集中していきます。

同じく過去の高校生の主張コンクール
中央大会の一場面

　この時いつも感心させられるのは、本来経験値が低いはずの高校生が、たった一つのある体験によって、大きくジャンプアップする瞬間があるということです。天才的なひらめきを雷に打たれたよう、と形容することがありますが、そんな感じの体験がこの「主張コンクール」に応募した作文の中で時々報告されます。すると、思わず担当の教員もそこに共感し、他のなるべく多くの人にもその内容を伝えたくなる訳です。

　そうこうしているうちにスピーチ原稿が出来上がります。そこでもう一人の指導者のお出ましです。できた原稿をいかに人前で説得力を持って伝えて行けるか、声の大きさや抑揚など話し方はもちろんですが、もっと大きな視点から、例えば立ち居振る舞い（身ぶり手ぶり）や視線の投げ方など、スピーチ自体を作品に見立てて、一期一会の現場における最高のパフォーマンスを実現するための試行錯誤を徹底的に行います。

　生徒は、以上のようなコンクールへの応募作業を通じて飛躍的に変化します。今回栄光を手にした吉野さんも、こんなひと夏の経験によっていくぶん面構えも変わったかに私には見えました。